

密教的浄土教の根拠

——横豎の教判を中心として——

宮坂宥勝

密教的浄土教——密浄融合——が覚鑊密教を大きく特色づけていることは、いうまでもない。それは端的にいえば、大日即弥陀、十方浄土（≡密厳浄土）即西方極楽浄土を眞理命題とするものである。

当時、蕩々として天下を風靡していた浄土教の阿弥陀信仰、往生浄土思想。

若冠にして仁和寺に学んだ覚鑊は、済運をはじめとして、あるいは名も知れぬ浄土教家たちからも阿弥陀信仰の大きな影響を受けたであろうことは想像に難くない。

二十歳にして高野山に登ってから青蓮や明寂などの別所聖たちとの交流がはじまったり、念仏聖の本拠地であった西谷に居を構えたりしたのも決して偶然なことではなかったと思われる。

覚鑊にあつて、大師教学の再興と浄土信仰への傾斜という両極がどのように融合されたのだろうか。

これまで論述したように、金胎兩部の二而不二、いわゆる金胎兩部不二思想を確立したのは、覚鑊であった。こうした曼荼羅理論にもとづいて浄土教を密教に位置づけた、もしくは密教の世界において阿弥陀信仰を確認し、即身成仏と往生信仰とを結合させたところの二重構造論的な覚鑊密教を創唱したとみることが出来るのである。

本稿では、覚鑊の密教的浄土教の確立を横豎の判釈を中心としてみることにしたい。

宗祖の『秘密曼荼羅十住心論』（略称『十住心論』）と『秘藏宝鑰』（略称『宝鑰』）は双璧の主著で、それぞれ広本、略本とよばれている。また、これらに對して『弁顕密二教論』（略称『二教論』）がある。これらの撰述において横豎の教相判釈がなされたのは、周知のとおりである。すなわち、『二教論』では横の教判が、『十住心論』『宝鑰』では豎の教判がなされている、と。前者は顕密二教の対弁であり、後者は十住心体系における顕密関係を明らかにしたものとす。

ところで、十住心体系に関して、『十住心論』は九頭十密、『宝鑰』は九頭一密を立場とするというのは新義では頼喩の所見であり、古義（高野山）では宥快によってさらに詳密な理論的考察がなされたというのが、通説である。

十住心体系に関しては、覚鑊には『秘密曼荼羅十住心略頌』『打聞集』『真言宗義』などの他に、『五輪九字明秘密釈』『顕密不同章』『自受法楽讚』『心月輪秘釈』『一心自覚頌』などに関連するのが認められる。また、十住心の特々な問題を取り扱った撰述に『真言宗義』がある。

これらの撰述において、いわゆる九頭一密、九頭十密の判釈的理解が認められるかどうかを窺ってみなければならぬ。

まず、横の教判からみると、その基調は『二教論』に説かれるように、(一)能説の教主、(二)所説の教法、(三)成仏の遅速、換言すれば法身説法、果分可説、即身成仏の三点に要約される。

この顕密二教の教判をさらに一歩進めて徹底させたのが、『五輪九字明秘密釈』『顕密不同章』『顕密不同頌』などにおける論述であって、宗祖の教判を踏襲しながらも、なおそこにはいくたの創見が披瀝されているのが注目される。

『五輪九字明秘密釈』は真言を釈するのに十門を設ける。このうちの第一択法権実同趣門において横豎の教判が偈頌の形でまとめ示されている。

横の判釈については「前の九種の教道の仏と後の一種の真言証通の尊と何の差別かある」という九頭十密的な立場を予想する発問—この問いの含意するところは、有快のいわゆる普門万徳住心である—に対し、頭密を弁別する一八頌をもって答としている。その冒頭に、さきの『二教論』の要旨を掲げた偈頌がある。

(二) 教論

頭教は応化二身の説 密教は法身一仏の説なり——(一)能説の教主……法身

頭教は随他意の教を立て 密教は判じて随自意の教となす——(一)

頭教は方便権施の教 密教は真実理尽の教なり——(二) 所説の教法……果分可説

頭教は三劫を経て成仏し 密教は一生に仏道を証す——(三)成仏……即身成仏

このうち成仏の遅速に関しては『即身成仏義』に「諸経論のなかにみな三劫成仏を説く」とあり、三密加持によって速疾に大悉地を得るところの即身成仏の実現と対応するのであるが、本頌では密教は一生に仏道を証するという。これはたとえば『心月輪秘密釈』に、一念に三祇(三劫)を超えて一生に三身を証すところ現生成仏あるいは一生成仏である。この点、宗祖の速疾成仏としての即身成仏とニュアンスの相違が認められよう。

その他の覚鑿における頭密対弁の特質については他の論叢で発表してある。本論文とは直接関わらないので省略する。

『頭密不同頌』にも、右の『五輪九字明秘密釈』の偈頌とほぼ全同のそれが冒頭に掲げている。参考までに示すと、次のとおりである。

頭は応化身の説 密は法性仏の談——(一)能説の教主

頭は随他意の教 密は随自意の説

頭は因分可説 密は果分可説

頭は修行種因 密は性徳円満なり——(三)成仏

覺鑊にとつて修行種因としての頭教は往生浄土信仰であり、性徳円満の密教は現生大覺、現身成仏であることは、
いうまでもない。さて、堅の教判については『十住心論』と『宝鑰』とではそれぞれ九頭十密と九頭一密の立場の相
違があるが、これを覺鑊の撰述に即して検証してみると、どのようになるだろうか。さきの『五輪九字明秘密釈』の
第一択法権実同趣門で、「問ふ。仏道に何等の教あつて、いくばくか権、いくばくか実、何れか浅、何れか深なる」
という権実・浅深の設問に対する答えとして、次の偈頌がある。

(一)異生羝羊は悪に耽る基る 愚童持斎は善を修める始め

(二)嬰童無為はすなはち天乘 唯蘊無我はこれ声聞

(三)拔業因種は縁覚の城 他縁大乘は法相の家

(四)覺心不生は三論の宗 一道無為は法華の宮

(五)極無自性は華嚴の教 秘密莊嚴は真言の法なり

(六)前の九住心を浅権と名づけ 後の一心仏を深実と号づく

(七)各々妙覚を称すれども実の仏にあらず 水中の円鏡何の実かあらん

(八)並びに円教と名づくれども皆半乘なり 池上の玉泡その真なし

(九)浅に従ひ深に向ふ次第の路は 劣を捨て勝を取る相続の位なり

(一)〜(六)までの一二句は十住心の各住心を要約し、(七)〜(九)までの六句は九頭一密を示す。(七)〜(九)は『宝鑰』に「九種の住心は自性なし。転深転妙にしてみな、これ因なり」とは、この二句は前の所説の九種の心はみな至極の仏果にあらずと遮す」とあるのを予想し、ここに説くのは、いわゆる顕密合論の十住心である。

さらに九頭一密を表明している文言が『一心自覚頌』にある。

三密漫荼の教は 独り七宗の外に出で

一心三摩の法は 特まことに万行の中に秀でたり

(中略)

金胎両部の教 顕略一乗の車

俱に此の指南を機わかって 同じく彼の迷方を示す

これは顕密を差別したものであって、ここにいう七宗は三論・成実・俱舍・華嚴・法相・律の南都六宗に天台宗を加えたものである。なおまた、密教に対して顕教を権方便として十住心体系における九住心を説いたものに『自受法楽讚』の偈がある。

浅頭を望まんがために 応化の臣を現じ

九種の筏を儲けて 衆善の坂かきりに到らしむ

さらに『法身説法頌』に次のようである。

すでに密壇に入らば妄因を超ふ 未だ顕証に及ばざれば実果にあらず

補処の儲君これその位なり 権仏の等覚もまたこの称なり

以上は九頭一密的に十住心体系を理解して顕密を弁別していることが知られる。それでは九頭の表明はどうであらう

うか。

『秘密曼荼羅十住心略頌』は、『十住心論』に説く九頭十密を極めて簡潔に叙述してある。そのなかに次の文言がある。

大日、これを慈しんで身を三岐に設け

遍照、かれを悲しんで教を九枝に施す

三岐は三身であり、九枝は第一異生羶羊住心から第九極無自性住心までを指す。そして、前九住心は第十住心の密教を離れて存しない。密教の立場からすれば、権方便としての顕教はそのまま密教でなければならない道理である。

『十住心論』巻第三に「もし真言の実義を解すれば、すなはちもしは天もしは人、もしは鬼畜等の法門はみなこれ秘密仏乘なり」とある通りである。

『覚鑊聖人伝法会談義打聞集』にも説く。

①秘密莊嚴住心より流延して、余の九種住心のところに各々薬となして、彼を益す、これ第一なり。

②次に各々の弥勒・文殊・観音・普賢等、自受法案のために、各々自眷属のために、説法す、これ第二なり。

③次に余の九種各々その位を改めず、直に大日如来と名づく。同一法界なる、これ第三なり。

(説明上、①②③の番号を付す。)

①は九頭十密の十住心を説くので、いわば応化二法身をふくむものとみなすことが出来る。というのは、②は自受用、他受用の受用法身の住心であり、③は普門万徳の十住心で自性法身と自他受用法身、応化二法身ないし等流法身との関係を示唆するものであるからである。

いうまでもなく、③は普門・一門の関係における十住心体系すなわち九頭十密を曼荼羅の世界に即して説いてい

る。

短い表現ではあるが、右の文言は九頭十密を最も端的に説いたものといつてよいであらう。

次に、九頭一密と九頭十密を併説し合糅するかたちでまとめた偈頌が『顕密不同章』にみえる。

① 顕密、略して一万の不同あり

② 顕は応化の説 密は法仏の談

③ 顕は顕略 密は秘奥

④ 顕は密より縁起す

②③は『二教論』の序に「それ仏に三身あり、教はすなはち二種なり。応化の開説を名づけて顕教といふ。ことば顕略にして機に逗へり。法仏の談話、これを密蔵といふ。ことば秘奥にして実説なり」とあるのを踏まえている。このように顕密対弁を説示しながら、④において突如として九頭十密的な言明をしているのである。

同書はひきつづき、九頭十密を説いている。

かくの如き等の人法縁起に、横豎の二意あり。豎とは秘密莊嚴より極無自性を縁起し、極無自性より一道無為を縁起す。かくの如く、ないし世間流転の心、これなり。

『秘密莊嚴両部一心頌』にはまた九頭十密と九頭一密とがまとめてあるのが認められる。

横に観ずれば十住一にして 二教の氷湯を泯し

豎に説かば一心十にして 三身の谷崗を扱ふ。

前の二句における十住一は九頭十密を表現したもので全一密教の立場、後の二句における一心十は九頭一密的であつて顕教は応化二身、密教は自性法身の説であるから、当然のことながら三身の谷崗を扱ふとして密顕を弁別する

のである。

覺鑊にあつてはもとより金胎两部不二を立前えとするのであつて、金剛界・胎藏界いずれにも阿弥陀如来（無量寿如来）が存するが、九頭一密的な立場からすれば、大日如来と阿弥陀如来とは差別されるが、九頭十密的立場からすれば、大日如来と阿弥陀如来は平等でなければならぬ。たとえば『五輪九字明秘密釈』に、「頭教には釈尊の外に弥陀あり、密藏には大日すなはち弥陀、極楽の教主なり。まさに知るべし、十方浄土は皆これ一仏の化土、一切如来は悉く是れ大日なり。毘盧・弥陀は同体の異名、極楽・密藏は名、異にして、一処なり。妙觀察智の神力加持をもつて、大日の体の上に弥陀の相を現す。およそ是の如くの觀を得れば、上、諸仏菩薩賢聖を尽し、下、世天竜鬼八部に至るまで、大日如来の体にあらざるべし」とあるのは、十住心体系に即していえば、全く九頭十密的な立場にたった深秘釈であることは、いうまでもない。

ところで、さきの『秘密莊嚴两部一心頌』にみえる「一心十」の一心という語に注目すべきで、しかもそれは十住心を統合包摂している意味においてである。これについては覺鑊の他の諸撰述における一心も当然、檢尋しなければならないが、そのためにはまず宗祖がどのような含意で一心の語を用いているか、予め窺っておくのがよいであろう。『請来目錄』の卷末では一心の利刀を頭教に、三密の金剛（杵）を密教の喩えとして示す。ここでは一心は頭教の立場であつて密教の三密と対比していることが知られる。この場合、一心を説く頭教は天台、華嚴さらには唯識（法相宗）などが含まれるものと解することが出来よう。^{*}

* のちの『十住心論』における第八住心では『中論疏』に説くところの不可思議の一心三觀を援用し、さらに『法華經開題』では天台は一心三觀をもって極とするという。こうした天台の一心三觀の一心もしくは華嚴の三界唯一心あるいは三界所有唯是一心における一心、唯識における唯識と同義の一心などを予想しているとみることが出来る。

『卍字義』では阿字本不生に關連して『大智度論』の薩般若の解釈を引用して一心に三種の智慧を撰するとするが、それは阿字を意味するという。すなわち一心に一切智・道種智・一切種智を含め、一切智は二乘に通じ、道種智は菩薩に通じるが、一切種智は仏に特殊なものだとする。

阿字の意味するところは一心だということになるので、必ずしも顕密の弁別を意識するものではないが、それに全仏教を含め、かつ一心を全く密教的に解釈していることはたしかである。

『秘鍵』に「觀人智慧を修し、深く五衆の空を照らす。歷劫修念の者、煩を離れて一心に通ず」という一心の用例もある。同じく『秘鍵』に存する「三界は客舎の如く、一心はこれ本居なり」は『念持真言理觀啓白文』にも同文がみえるが、この際の一心も顯教的な理解のそれではないようである。

然るにまた、『卍字義』には一心法界という表現があり、一心と法界とを同格とみる。そして、一心を虚空に喩えて「一心の虚空」というが、「一心の虚空」を「三密の虚空」と換言していることから、一心と三密とによって顕密を弁別するさきの『請来目錄』とは全く立場を異にするといわなければならない。この一心法界の語は『秘藏記』にも存する。「我が一心法界のうちに毘盧遮那なし四仏四波羅蜜、十仏刹微塵数の如来、宛然としています。煩惱の雲霧のために覆弊せられて明了に見ることを得ず」と。これは宗祖のいう「衆生本具の曼荼(羅)」もしくは「自心仏」を指すのであって、一心なる法界すなわち一心を曼荼羅世界とみるものである。

自心仏については『宝鑰』第九極無自性住心において、一切存在に等量の法身はわが心であるとし、「声縁の識も知らず、薩埵の智も知らず、奇哉の奇、絶中の絶なるは、それただ自心仏か」と。『十住心論』第九極無自性住心には「一心の仏、諸法を鑒知す」ともいう。『宝鑰』第一異生羝羊住心には二極定言の一切は自心仏の名称であるとす。『もしよく明らかに密号名字を察し、深く莊嚴秘藏を開くときは、すなわち地獄・天堂、仏性・闍提、煩惱・菩

提、生死・涅槃、辺邪・中正、空有・偏円、二乗・一乘、みなこれ自心仏の名言なり。いづれをか捨ていづれをか取らん。」

「一心の法城」(『付法伝』)、「一心の本法」(『宝鑑』第九住心)などの一心も自心仏としての一心と解してよいであろう。

しかしながらまた、「五大の所造、一心の所遍」(『大日経』衆生狂迷)のように、五大に対する識大としての一心を意味する場合もある。

このように、宗祖の撰述にみられる一心の用例を検証すると、多義的であって必ずしも密教的理解に限られるわけではない。しかも、一心は十住心を統合包摂したものであるという点はまだ言明されていない。しかし、一心において自心法身を認めていることは留意しておいてよいと思われる。次に覚鑊の場合の一心の用例を窺ってみることにしよう。

まず、『秘密莊嚴兩部一心頌』^{*}に次のように説く。

* 兩部一心とあるのは、一心に金胎兩部を統合することによって兩部不二なることを確立するものである。

六大法身の体は 大虚のごとく遍ねく^{うみ}解の如く清し

一心性仏の用は 深海のごとく淨く空のごとく^{おお}宏いなり

遮情に十住を思へば 種智の鏡^{かがみ}ここに^み瑩き

表徳に三徳を觀ずれば 一心の海すなはち澄めり

五言一句が対をなしているが、六大法身はすでに知られるように覚鑊の創見であって、六大法身と一心性仏は同格である。六大法身の本体を大虚に喩えるのは、『吽字義』に「一心の虚空」とあるのを想起させる。そして一心性仏

は一心を自性法身とするのであるから、これまた宗祖の撰述にみられる通りである。「種智の鏡」と「一心の海」も対句になっている。種智の鏡はさきの『大智度論』に説く三種智のうちの仏不共の一切種智を喩えたものであるから、遮情的に十住心を差別したとき、一切智の二乗、道種智の菩薩が予想されて、九頭一密的立場が明らかに看取される。「一心の海」は一心なる自性法身を喩えたものであって、表徳的に三密平等を觀じる場合、一心は三密平等の理であるから、九頭十密の深秘積の立場を明確にしていることが知られる。この際、宗祖が「一心の虚空」を「三密の虚空」とする『吽字義』の所説が当然のことながら前提となっているとみることが出来る。

宗祖は「一心の仏、諸法を鑒知す」というが、覺鑒は一心は諸法であり、諸法は一心であるとして、仏界と衆生界との關係を明らかにする。

すなわち『阿弥陀秘積』にいう。

一心すなわち諸法なれば 仏界衆生界 不二にして二なり

諸法すなはち一心なれば 仏界衆生界 二にして不二なり

前二句は演繹的に兩界の不二而二を、後二句は帰納的に兩界の而二不二を示したものである。これは華嚴經の「三界は唯一心、心外に別法なし、心・仏及び衆生、是の三、差別なし」を密教的に理解した『三界唯心積』の冒頭で一切衆生と一切諸法とは唯一であると説くのに関連している。

三界所有の 一切の衆生と

一切の諸法とは 皆唯一心なり

一法として一心に あらゆることあることなし

法は唯一心なり 心は唯諸法なり

そして、このような一心は諸仏の万徳を具足していると説く。さらにまた、我心・仏心・衆生心を平等無二であるとする。

その他、『心月輪秘積』には一心に万行を撰することによって、六大瑜伽・五部互融・四種曼荼・三密平等・二界輪円・一心如理・総撰任持・加持涉入などの名義も成立し、また方法を一心に収めることによって能撰本源の密蔵もあるのだという。

『真言浄菩提心私記』に一心と法身を対比して説く。「一心平等の理を障ふる不覚を無明といふ。法身はこれ人法理事平等の一心の故に」と。一心すなわち自性法身であることは宗祖の撰述についてすでにみたところであるが、『秘密莊嚴両部一心頌』には「一心の仏陀（渤駄）」といっている。

また、『宝剣頌』には一心は十法界に瑜伽する、と。この場合の十法界は顯教のそれではなく、『理趣釈経』にもとづくところの地獄・餓鬼・畜生・人・天の五凡、声聞・縁覚・菩薩・権仏・実仏の五聖であるから、一心において十住心が見出される道理である。

【秘密莊嚴両部一心頌】には端的に次のように説いている。

一心に二徳を含む 両部これその称なり

二界千理を載す 曼荼はすなはち彼の乘なり

一心に両部曼荼羅を見出すのは、十住心体系に即すればまさしく九頭十密的な理解が認められるといつてよいであろう。

しかしながら一面において覺鑊の一心観には、次のような点が存するのにも注意すべきである。すなわち、『真言浄菩提心私記』にある鏡の比喩が、それである。

鏡に（理智平等の）一心を、所現の影像に一心縁起の俗諦、恒沙の諸法を喩えているのは、甚だ華嚴的な捉え方だといわなければならない。これは、水波の喩に類同する。

一心と諸法とをいわば実在と現象との関係において認識することが底流にみられるとすれば、仏界と衆生界、さらに密教と顕教との関係などにおいてもインド的表現をかりるならばプラティボンバ (pratinbha) 的な理解の仕方が看取されるように思われる。

顕は密より縁起する、あるいは顕は密より流延するというのがそれで、さきにこれを九顕十密の表明であるといっただけども、実は華嚴哲学の世界観が何らかの意味で反映しているのではなからうか。

横の教判における密教を两部不二、理智不二と規定し、豎の教判において十住心体系を一心において把握し、しかもその一心の理解の仕方が極めて華嚴的な立場からなされている。こうした点が宗祖の教判と異なっているところである。ただし、覚鑿にあっては、これらの教判は必ずしも体系化するまでには至らず、未完で終わっている感をまぬがない。

『一心自覚頌』の初めに一心に三密を備えるとは、宗祖の一心と三密を弁別した初期の撰述『請来目錄』から一心すなわち三密と解する『吽字義』への一心観の転換を見事に要約している。

一心に二義あり

二門非一の故に

一は念を一境に摂む

二は法を唯心きこに入る

一は一にあらざる一なるが故に

無数の五智あり

心は心にあらざる心なるが故に

難思の三密を備ふ

以上を踏まえて、『三界唯心釈』には己心弥陀、唯心浄土が示される。

心仏不異なれば 我すなはち弥陀なり

依正無二なれば 意これ極楽なり

これを要するに、覚鑊の己身弥陀、唯心浄土の密教的浄土教は、宗祖の自心仏、心即自性法身、衆生本具の曼荼羅を基調として展開されているのである。